
双子の幼馴染みがヌードモデルをしてくれる
Full color 40page
illustrationbook
18歳以上対象
R18
成人向け
緒方亭

時系列と既刊の紹介



絵師になりたいボクのために一肌脱ぐ幼馴染み



絵師になりたいボクのためにまた一肌脱ぐ幼馴染み



幼馴染みと夏の思い出



幼馴染みが間違ってヌードモデルをしてしまう



両思いの幼馴染みがヌードモデルをしてくれる

本作



向井津奈美
誕生日2月4日
T156 B93 W58 H87

電子版にのみ登場していたヒロインの双子の妹



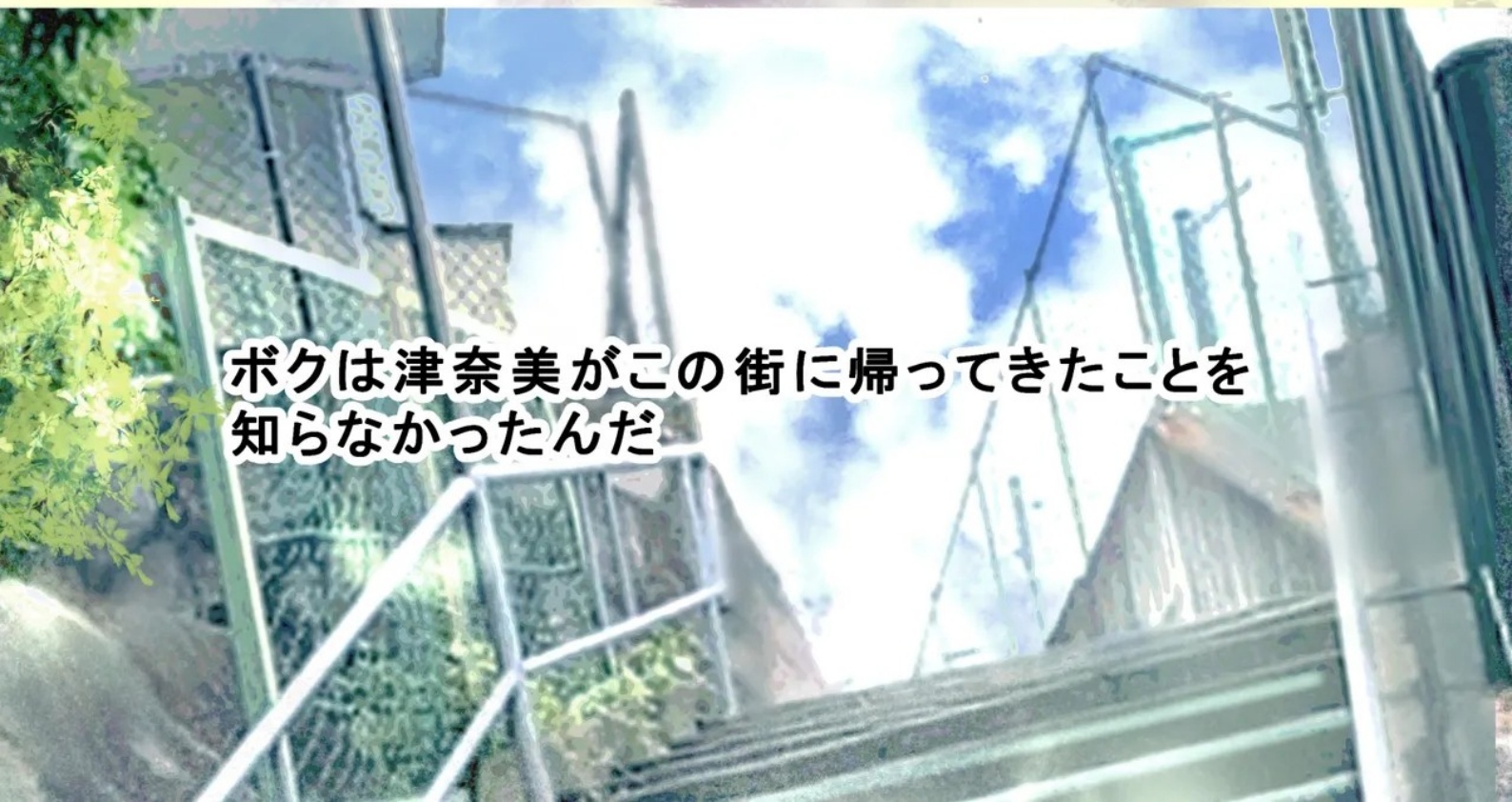
向井沙奈美
誕生日2月4日
T156 B91 W58 H87

絵師になりたい主人公（ボク）のために一肌（全裸）脱ぐ幼馴染みの女の子。主人公とは最近恋人になった

pixivbooth、各種ダウンロードサイトなどで
販売中→「緒方亭」で検索



最近恋人になった幼馴染みの沙奈美（さなみ）には双子の妹がいる。
小さい頃は三人一緒によく遊んだものだが
今は家庭の事情で妹の津奈美（つなみ）は少し離れたところに住んでいる



ボクは津奈美がこの街に帰ってきたことを
知らなかったんだ


ある日差しの強い日
〝彼女〟の後ろ姿を見つけて声をかける
「……」
（あれ？今日はメガネをかけているんだな）
「イラストコンテストの締め切りが近いんだ!!
またモデルになって欲しい」
「えっ？…」


「頼む!!この通り!!」
「え・・・ええ・・・良いですよ」
「ありがとう!!沙奈美!!今からでも良いか？」
サア・・・
（姉さんと間違っているんですねちょっとからかってみたくなりました）


「今回はちょっと初々しい感じで脱いでほしいんだ」
「あのね・・・私・・・」
「よろしく頼む!!」
「・・・あの・・・」
(あれ?沙奈美・・・下着の趣味が変わったかな?)
(まさかヌードモデルだなんて・・・姉さんはいつもこんなことをしているの?)


「……」
沙奈美はボクの要望通りまるで
はじめて裸を見せるかのように演技してくれている
（どうしよう…
でも悪いのはわたしだし…）


「んーんーっ」
（最後の一枚がどうしても脱げない…）
（今なら本当のことを言えば笑って許してくれるかな…）
初めて脱いだ時の沙奈美を思い出させる名演技だ
彼女ににこんな才能があったとは


なぜか
分からないけれど最後の一枚を脱ぐ姿が
いつもの沙奈美とまるで違う気がした
（あなたになら・・・
全部見られても・・・）


「お・・・お待たせしてごめんなさい
どど・・・どんなポーズをしますか？」
本当に
初々しい演技をする
沙奈美に感心する
そしていつ見ても
沙奈美の体は奇麗だ・・・
「そうだな・・・
ちょっとぎこちない風に
上も下も隠さないみたいな感じで
頼めるか？」
「は・・・はい・・・」


「こ・・・これでいいですか？」
沙奈美はボクの要望通りにぎこちなくも全てを見せるポーズをしてくれた
（す・・・すっごくすっごく恥ずかしい・・・姉さんはいつもこんなことをしているの・・・？）


「少しずつ慣れていく感じでポーズを変えてみてくれ」
「はい……」
（あれ？なんだか少し楽しくなってきたような気がします……）


…なんだか
いつもの沙奈美より
大胆になってきた
ような…


今日の沙奈美が
いつもと雰囲気が違って見えるのは
メガネのせいだろうか・・・
それとも・・・・・・


「!!」
ある違和感に気づいた
ボクは思わず彼女に
近寄ってとある部分を
凝視した
「キャッ!!
なにをするの!?」
「沙奈美・・・お前こんなとこに
ホクロあったっけ?」
「・・・もしかして津奈美?」


「二人とも何やってるの？」
「沙奈美・・・!?」
「インターホンを鳴らしても出なかったんで入ってみたら・・・」
・・・そういえば壊れていたんだった
「あなたわたしの妹の津奈美まで裸にして・・・」
「違う!!これは色々行き違いで・・・それにヌードになると言い出したのは沙奈美だろ!!」
「え？沙奈美姉さんが言い出したの？」
「論点はそこじゃないいいい!!」
ダメだ
あまりに突然の出来事に思考速度が追いつかない
「お兄ちゃん・・・？」
「この声はまさか・・・!?」


「妹!!」
このタイミングで
言うことではないが
ボクは普段から
妹を妹と呼んでいる
「沙奈美さんと・・・
津奈美さん・・・?
なんで津奈美さんは
裸なの・・・?」
「お・・・お前今日は
漫研で遅くなるんじゃ
なかったのか!?」
「うん
ちょっと忘れ物して
・・・」
妹まで乱入するとは・・・
ボクは沙奈美と付き合い始めて
時々ヌードモデルをしてもらっていることを
まだ話していなかった
あれ？順序が逆だっけ？
ヌードモデルをしてもらってから付き合い始めて・・・
そんなことはどうでもいい！
この事態をどう収拾させる！？
「お兄ちゃん・・・」
「妹・・・」
「まさかとは思うけど・・・・・・」


「いつまでもはっきりしないお兄ちゃんに
沙奈美さんが意を決してヌードモデルを買ってでて
二人はお付き合いをすることになって
お兄ちゃんは津奈美さんがこの街に帰ってきたことを知らなくて
うっかりモデルを頼んでしまい
津奈美さんもちょっとからかってみるつもりで
引き受けちゃったんだけどヌードモデルって知らなくて
沙奈美さんに比べて性格の大人しい津奈美さんは
言い出すに言い出せなくなったのね
そういえばちょっと前から
ウチのインターホンが壊れていたわ」
妹よ・・・！
将来ボクに文才が生まれたら
「妹名探偵はマンガ家志望！」というラノベを書こう！
もちろん挿絵もボクが描く！
「ね・・・ねえ・・・わたし沙奈美さんと津奈美さんに
お願いがあるんだけど・・・」
妹が何やらもじもじしながら言う


「こ・・・こんな感じで良い？」
沙奈美が困惑しながら言う
「わたし百合マンガ家になりたくて
ずっとモデルを探していたの」
（妹よ・・・
お前はそんなマンガを
描いていたのか）
「姉さんもう少しくっつきましょう」
なぜか津奈美はノリノリの様子


「……」
あまりの美しさにボクは言葉を失う
「ねえ二人ともちょっと笑ってみてくれますか？」


ここは
現代の桃源郷かもしれない
本気でそう思ったんだ・・・


「ね・・・ねえちょっと
どちらか攻めてみてくれませんか？」
「ちょ・・・妹・・・お前なんてことを!!」
「え？攻めるってなに？」
「じゃあわたしがちょっとだけ・・・」
きょとんとする沙奈美の背後に
津奈美がまわる
「ん・・・」
ぴくん。
二人とも
素直すぎだろ・・・


「姉さん…
すごく柔らかい…」
ピクッ
「そ…そう？」
ピクッ
ピクッ

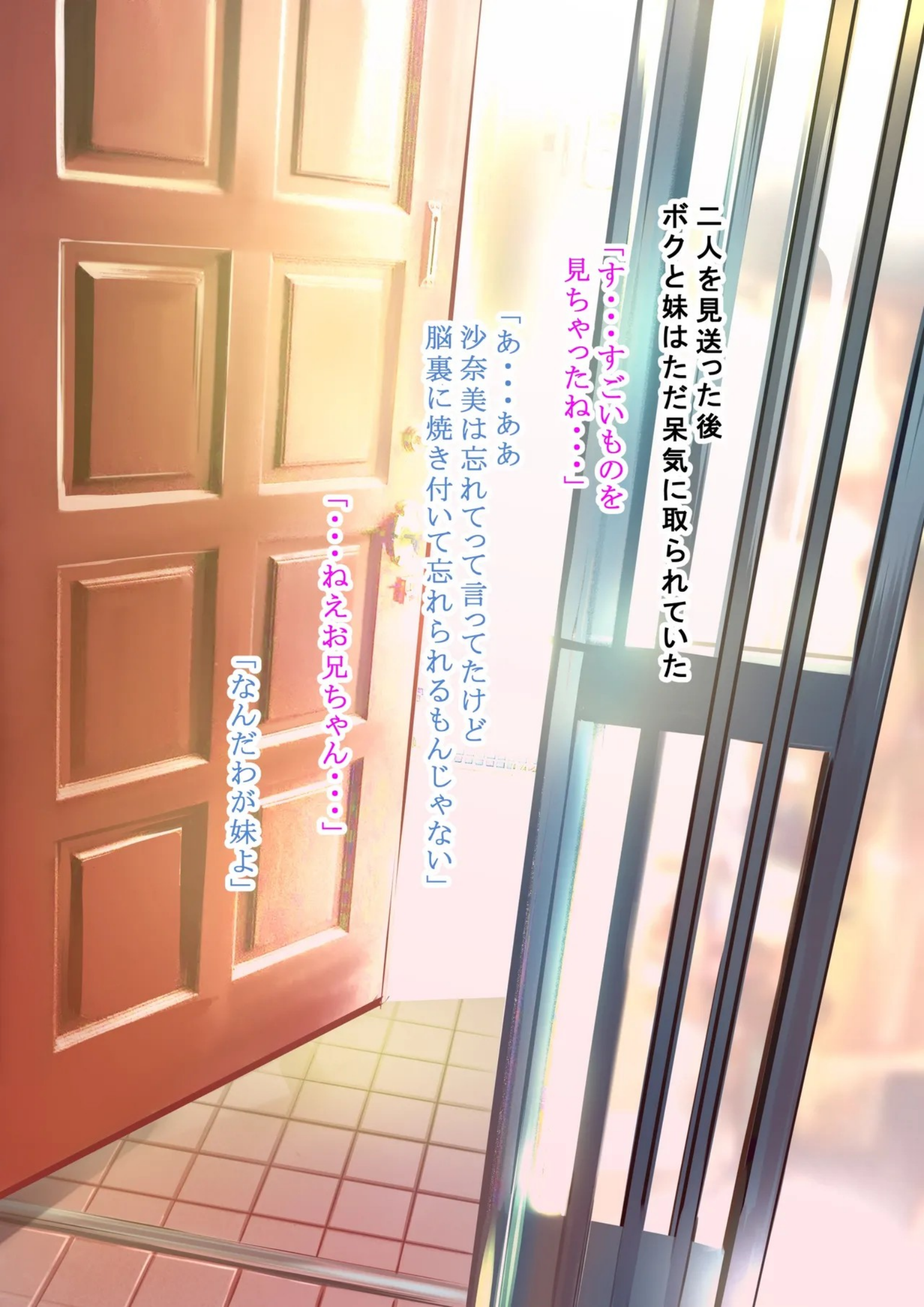

びくんっ
キュッ..
「あっ・・・」


「あっ・・・んっ・・・
ちょっと・・・津奈美・・・」
「我慢してください姉さん・・・
芸術のためです」
（姉さん可愛い・・・）
びくっ
「んっ・・・」
「んっ・・・」
「あんっ・・・
そこは・・・」
びくっ
「・・・・・」
「・・・・・」
びくっ
ボクとボクの妹はただただ
それを見ていた・・・


「あっ…」
「あっ…」
（姉さん…やっぱり双子ね…
同じところが好きなんだ…）
びくっ
びくっ
「あんっ」
「んっ…」
「やだっ…」
「だめ…っ」
「やめてっ…」


あぁあ♡
びくんびくん


「お・・・お願いだから
今日見たことは忘れてね・・・」
「ごめんなさい姉さん・・・
つい調子に乗ってしまいました」


二人を見送った後
ボクと妹はただ呆気に取られていた
「す・・・すごいものを
見ちゃったね・・・」
「あ・・・ああ
沙奈美は忘れてって言ってたけど
脳裏に焼き付いて忘れられるもんじゃない」
「・・・ねえお兄ちゃん・・・」
「なんだわが妹よ」


「わたしもお兄ちゃんにヌードを描いてもらいたくなっちゃった」
「!!」
「いつでもいいぞ 今さら実の妹の裸を見ても なんとも思わないしな」
わざと少しそっけなく答える
「わたしだって結構 成長してるんだからねっ」
「おお なら今度じっくり 確かめてやる」
ボクと妹は本当は血がつながっていない
そしてそのことを妹は知らないはずなんだ


幼馴染みにI字バランスを頼んでみた
つい最近彼女になったボクの幼馴染みは絵師になりたいボクのためにヌードモデルになってくれる
「ふーん♪ふふーん♫」
「あのさ沙奈美・・・」
「んー？なに？」
「いまSNSでI字バランスっていうのが流行っているんだけど沙奈美できるか？」


「で・・・できるけれど・・・」
「頼めるか・・・？」
「えええ？・・・あれすっごくすっごく恥ずかしいポーズよね・・・？」
「た・・・頼むよ沙奈美・・・あれこそ実物を見ないと描けないんだよ」
「・・・・・・」
「頼むよ・・・この通り!!」
「・・・分かった・・・」


「はい・・・これで良い？」
「・・・・・・」
「これで許して・・・
水着を着ててもすっごく
恥ずかしいんだから・・・」
本当に恥ずかしそうに
している沙奈美を
見ていると少し
意地悪がしたくなってくる
「あのさ沙奈美・・・
やっぱりヌードでして欲しい」
「え・・・？」
「頼むよ沙奈美・・・大丈夫・・・沙奈美の体に
奇麗じゃないところ なんてありはしないさ」
「・・・・・・分かった・・・」


不覚にもボクは見惚れてしまっていた
さっきほんの冗談のつもりで言った
彼女の体に奇麗じゃないところなんてない
という言葉を噛みしめていた
「……」
「……」
「……」
しばしの沈黙


「ごめん!!
すっごくすっごく恥ずかしくて
もう限界・・・!!」
「お・・・おう・・・
もう十分だありがとう・・・」


「ごめんねごめんね…
あまり役に立てなくて…」
「いや…そんなことないって
無理を言ってごめん」
涙目の彼女を見て
もう冗談はほどほどにしようと思った


「クスクス・・・」
「ど・・・どうしたんだ？」
「はじめてヌードになった時のドキドキを思い出したの」
困ったことにボクは改めて彼女に恋をしてしまった


幼馴染みにI字バランスを頼んでみた（津奈美ver）
「あのさ津奈美・・・」
「なんですか？」
「いまSNSでI字バランスっていうのが流行っているんだけど津奈美できるか？」


「で・・・できるけれど・・・」
「た・・・頼めるか・・・・？」
「ええぇ？・・・あれすっごくすっごく恥ずかしいポーズですよね・・・？」
「た・・・頼むよ津奈美・・・あれこそ実物を見ないと描けないんだよ」
「・・・・・」
「頼むよ・・・この通り!!」
「・・・分かりました・・・」


「・・・これで良いですか？」
「・・・・・・」
「これで許して・・・
水着を着てでもすっごく
恥ずかしいんです・・・」
本当に恥ずかしそうに
している津奈美を
見ていると少し
意地悪がしたくなってくる
「あのさ津奈美・・・
やっぱりヌードでして欲しい」
「えええ!?」
「頼むよ津奈美・・・大丈夫・・・津奈美の体に
奇麗じゃないところ なんてありはしないさ」
「・・・・・・分かりました・・・」


不覚にもボクは見惚れてしまっていた
さっきほんの冗談のつもりで言った
彼女の体に奇麗じゃないところなんてない
という言葉を噛みしめていた
「……」
「……」
「……」
しばしの沈黙


「ごめん!!
すっごくすっごく恥ずかしくて
もう限界です・・・!!」
「お・・・おう・・・
もう十分だありがとう・・・」


「ごめんなさい…
あまり役に立てなくて…」
「いや…そんなことないって
無理を言ってごめん」
涙目の彼女を見て
もう冗談はほどほどにしようと思った


「クスクスクス・・・」
「ど・・・どうしたんだ？」
「はじめてヌードになった時のドキドキを思い出しました」




10ページ目
没イラスト


あれ？今日はメガネをかけているんだな
す・・・すっごくすっごく恥ずかしい・・・
姉さんはいつもこんなことを
しているの・・・？
「姉さん・・・
すごく柔らかい・・・」
「そ・・・そう？」